

令和元 11/29

総合市民センター

☎(24)9511 ㊟(23)7444
㊟原則として祝日および年末年始

▼ガビン先生と楽しく学ぼう！日本の
四季と古典文学～秋の章・冬の章～
11月13日㊟（秋の章）、12月11日㊟
（冬の章）10時～11時30分／講師＝
伊藤 雅敏先生／定員＝25人（申込
順）／申込＝9月17日㊟9時～電話に
て、土日とも17時まで申込可



- ① 11/3金 春・夏
- ② 11/13金 秋
- ③ 12/11金 冬

秋の章

日本の四季と

古典文学

楽しく学ぼう

ガビン先生と



令和二年十一月十三日

伊藤 雅敏



no. 3



L



①



梅花の宴



新元号「令和」記念

はじめの万葉集講座

令和元年十月二十九日十時
故郷平越谷市民センター

仲藤雅敏

(4) 新元号「令和」の意味とは？

首相談話より「春の訪れを告げ、

見事に咲き誇る梅の花のように

一人ひとりが明日への希望とともに

それぞれの花を大きく咲かせることができる

そうした日本でありたいとの願いを込め

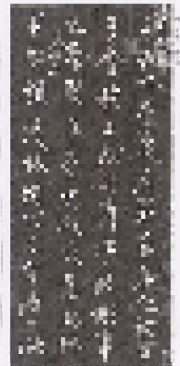
決度した。

人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ



序の序文(中国の詩序をまねる)晋 王羲之「蘭亭集序」

今日は正月の佳日だ
天氣に恵まれ
良日だ
こころすばらしい日に
気心の知れた友と仲間
二二に集まったり人たちは
「庭の梅」と題して
短歌を作れ。



大伴旅人と交遊があった「梅花集」

(815) 大伴旅人 紀男

(816) 大伴旅人 山ノ野

(818) 大伴旅人 山上憶良

(821) 大伴旅人 山上憶良

(822) 大伴旅人 山上憶良

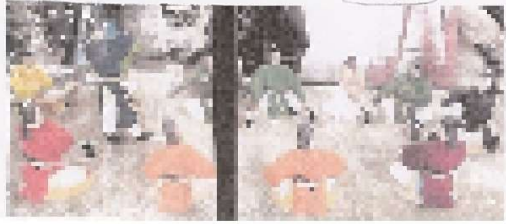
梅花集の成立
4月6日書簡
大伴旅人が贈る
古田直
大伴旅人が贈る
大伴旅人が贈る
大伴旅人が贈る

「令和」の由来は福岡県太宰府市で採られた歌



あの時は楽しかったんだなあ
と思ひ出します。

- [816] 小野 老 女 (大伴旅人)
- [817] 栗田 人? (大伴旅人)
- [818] 山上 憶良 (大伴旅人)
- [819] 大伴 旅人 (大伴旅人)
- [820] 葛井 大成 (大伴旅人)
- [821] 大伴 旅人 (大伴旅人)
- [822] 大伴 旅人 (大伴旅人)



我が園に梅の花散る
ひさかたの天より雪の
流り来るかも

(1730年)

我が園に

梅の花散る

ひさかたの

二天より雪の

流れ来るかも

大伴の旅人

梅花歌卅二首并序
 天平二年正月十三日、
 奉于帥老之宅、申宴會也。
 于時、初春、令月、気淑風和。
 梅披鏡前之粉、蘭薰珮後之香。
 加以、曙暎移雲、松掛羅而傾蓋。
 夕岫結露、鳥封穀而迷林。
 庭舞新蝶、空歸故鴈。
 於是、蓋天坐地、促膝飛觴。
 忘言一室之裏、開衿煙霞之外。
 淡然自放、恍然自足。
 若非翰苑、何以摛情。
 請紀著梅之篇、古今夫何異矣。
 宜賦園梅、聊成短詠。

梅花の歌三十二首并せて序

天平二年正月十三日に
 帥老の宅に奉まりて、宴會を申べたり。
 時に、初春の令月にして、気淑く風和く。
 梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。
 加以、曙の暎に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾け
 夕の岫に露結ひ、鳥は穀に封ぢられて林に迷ふ。
 庭に新蝶舞ひ、空には故雁歸る。
 ミニ、天を蓋にし地を坐にし、膝を促け、觴を飛ばす。
 言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開く。
 淡然に自ら放し、恍然に自ら足りぬ。
 もし翰苑にあらざるは、何を以てか情を摛べむ。
 請はくは著梅の篇を紀せ、古今と夫れ何か異なむ。
 園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

梅花の歌三十二首と序

天平二年正月十三日

万葉集

梅

120首 (118) 12 柳 13 鶯

大宰師旅人御の邸宅に集つて、宴會を開く。
 折しも、初春の正月の佳日で、気は爽々風は穏やかである。
 梅は鏡の前の白粉のまわりに白く咲き、蘭は匂い鏡のよりに香る。

桜

42首 (44) (31) (雪)

それはかりそめな花、夜明けの峰には霞がたかり、松はその峰の頂をまわつてて、かたがたつに見

古今和歌集

梅

18首 (20)

夕方の山の頂には薄霧がかかると、鳥はその霧の間にけむりかきながら林の中に迷っている。
 庭には今年生み出した蝶が舞ひまわつて、空には去年の雁が帰つて行く。
 その日、天を屋根にし地を席にし、互いに膝を近づけ酒杯をすすむ。

桜

70首 (100)

一瞥のうちに花は散り、その花の影ももたれぬ。外の大気に向かひて、人づかぬ花の

新古今和歌集

梅

27首

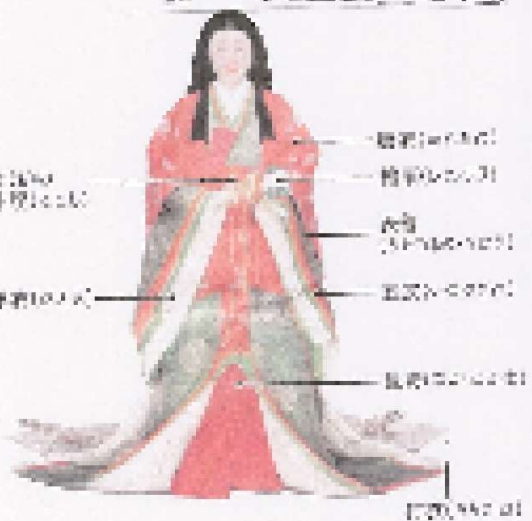
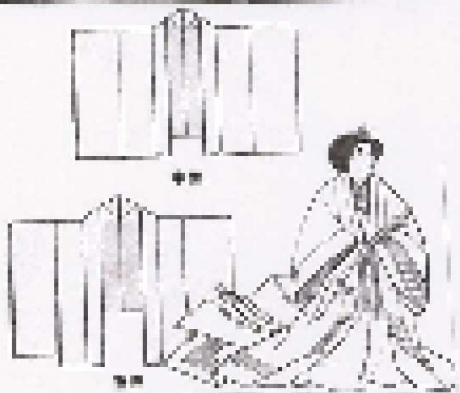
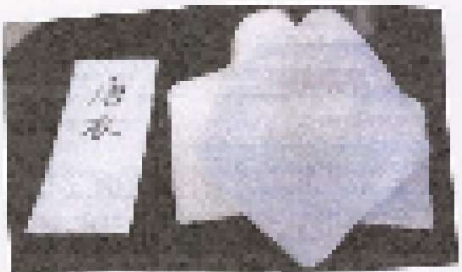
まはりとして各自気楽に振舞ひ愉快になつて、各自満ちたて思ひである。
 もとく文章にこそあらはれぬ、この二のつすむの心、この二のつすむの心、この二のつすむの心。

桜

100首

諸君よ、著梅の詩歌を所望して、昔も今も風流を愛する、この二のつすむの心、この二のつすむの心、この二のつすむの心。
 この二のつすむの心、この二のつすむの心、この二のつすむの心、この二のつすむの心、この二のつすむの心。

うのまほやかまづさむいとおもへ
 ほきこもちれあ見てある人のいさへ
 のきつたといふ流きききふみよ
 すへてきりの心をよかんといひたれはゆる
 から衣まづちたな。流きききふみよ
 ちるくまぬるをむをう思
 とよあつたんみる人かれいつの
 へるなみしおとてかひのまわ



伊勢物語九(三) 写本
 から

現代語訳

昔男がいまいた。その男は、我が身を必要のない者と想ひ込んで

京にはおるまい。東の方で住むのに適した国を探すために、出かけてまいりて、

以前から友人としてゐる人、一人二人と一緒に出かけました。

一行は東國の方道を知つてゐる人はなく、迷ひながら行つたのでした。

ほろほろと三河の国の八橋と云ふところに行き着きました。そこを八橋と云ふのは

水が流れる川が八方に分岐してゐるので、橋を八つ渡してあることに

甚いて、八橋といつたのでした。一行はその沢のほとりに木の陰に下りて座り、馬から

半乾飯を食へました。その次には、かきうはたがたいすりすばらく咲いて

いまいた。それを見てある人が言うことは、一行の中の「かきうはた」といふ五

文字を和歌の各句の頭文字に置いて、後の気持を詠みなさい」と

言つたので詠む

何處も着て 長髪は散らした 身になした 都に 残したまは唐衣のよりに、妻がゐるので、はるはる来たりました。旅をしつゝと想ひがこぼれ

と詠んだので、みな乾飯の上に涙を落としたので、ふゆけてしまひました。乾飯は

池たけ

かきつばた

渡り板



あやめ

花の元に網目模様

文目

紫(まゆに白)

乾草所

30~60cm

葉 主脈不明

5月上中



かきつばた

外花被片に白い斑紋

杜若

網目なし

青紫 紫 白 紋り

水中や 湿った所

50~70cm

葉 主脈細い

5月中下



花菖蒲

外花被片に黄色斑紋

はなしょうぶ

網目なし

紫 紅紫 紋り 覆輪

湿った所

80~100cm

葉 主脈太い

6月上下

二巾鳴き渡れ

あやめ草 かつらにせむ日

「ほととぎす」といふ時なり

万葉集 19巻十

あやめぐさ

菖蒲湯

しょうぶ

(6)

あじさいが幾重にも群らびて咲くように、変わりなく

いつまでも おだやかでいて下さい。わたしは、この花を見るたびに

あなたを思い出しましう。 橘諸兄 卷二十 4448

あぢさいの 八重やえ咲くごとく

八つ代やちしろにを いませわが背せ子こ

見みつつ思しははむ



二人で万葉集を完成し
藤原氏の在政に苦勞する

カクアジサイ
その後、まったく取りあげられず
(中世の歌種を經て)
芭蕉の句に やっと現れる
楓草子にも源氏物語にも (表へ)
出で「よい

物言ひぬ木でさえ

あじさいのような移りやすいものがあります
諸弟らの巧みな占いの言葉に私は

はまされま

言問はぬ木すらあぢさい

諸弟もろとらが 練ねりのむらとに

詐あぢさいえけり

大伴家持 卷四 773

春と秋、どちらが好きですか？

春は一年の始まり、秋は一年の終わりを告げる季節。春は希望と成長の季節、秋は収穫と静寂の季節。あなたはどちらが好きですか？

春と秋、どちらが好きですか？

春は一年の始まり、秋は一年の終わりを告げる季節。春は希望と成長の季節、秋は収穫と静寂の季節。あなたはどちらが好きですか？

春は一年の始まり、秋は一年の終わりを告げる季節。春は希望と成長の季節、秋は収穫と静寂の季節。あなたはどちらが好きですか？

春と秋、どちらが好きですか？

春は一年の始まり、秋は一年の終わりを告げる季節。春は希望と成長の季節、秋は収穫と静寂の季節。あなたはどちらが好きですか？

40
41

春の理由

春は一年の始まり	28%
春は希望と成長の季節	18%
春は桜の季節	15%
春は新しい出会いの季節	12%
春は希望と成長の季節	10%
春は希望と成長の季節	8%
春は希望と成長の季節	6%
春は希望と成長の季節	4%
春は希望と成長の季節	2%

秋の理由

秋は一年の終わりを告げる季節	25%
秋は収穫の季節	18%
秋は静寂の季節	15%
秋は紅葉の季節	12%
秋は静寂の季節	10%
秋は静寂の季節	8%
秋は静寂の季節	6%
秋は静寂の季節	4%
秋は静寂の季節	2%

春の理由

春は一年の始まり	28%
春は希望と成長の季節	18%
春は桜の季節	15%
春は新しい出会いの季節	12%
春は希望と成長の季節	10%
春は希望と成長の季節	8%
春は希望と成長の季節	6%
春は希望と成長の季節	4%
春は希望と成長の季節	2%

秋の理由

秋は一年の終わりを告げる季節	25%
秋は収穫の季節	18%
秋は静寂の季節	15%
秋は紅葉の季節	12%
秋は静寂の季節	10%
秋は静寂の季節	8%
秋は静寂の季節	6%
秋は静寂の季節	4%
秋は静寂の季節	2%

冬木成

春去来有

冬より春去り来れば

⑨

不喧有之

鳥毛来鳴奴

鳴
喧がざりし鳥も来鳴きぬ

不開有之

花毛佐家礼拝

咲
開がざりし花も咲けり

山平茂

入而毛不取

山を茂み入りとも取らず

草深

執手母不見

草深み執り手も見ず

秋山乃

木葉平見向者

秋山の木の葉を見ては

黄葉平婆

取而曾思奴布

紅葉
黄葉をば取りて思ふ

青乎者

置而曾歎久

青きをば置きて歎く

曾許之恨之

秋山吾は

そぞろ恨め秋山吾は

冬が過ぎて春が来ると

鳴いていながら鳥も来り

咲かなかった花も咲く

けれど山には木が生い茂り入って採ることもできない

草が深くて手にとりて見ることもできない

秋山は木の葉を見ても

もみぢと手にとりていふと思える

また青いままの落ちてしまったのを置いてため息をつく

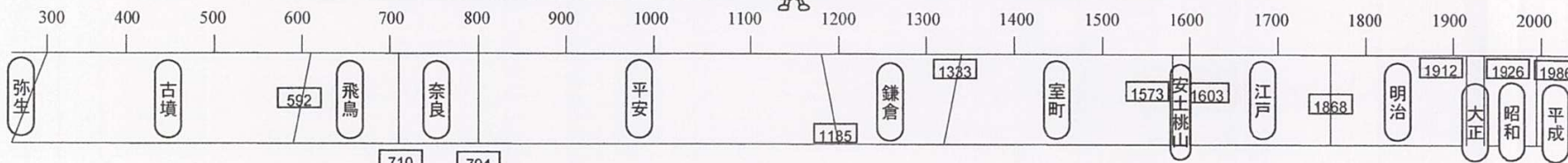
残念だが秋はそんな秋山がすばらしいのを秋を選ばず

天智天皇の御宇に藤原鎌足が万葉集を編み出した

（春を称えて
秋を送る）

秋の 花草木の 歴史

ミニ知識



2000年前 中国原産
 朝鮮半島を介して伝来したか?
 3世紀末 王仁?
 遣唐使が持ち帰った?

梅
 751年「懐風藻」に葛野王の五言詩「万葉集」に120首の詠歌
 紅梅渡来

960年頃 村上天皇が病梅干しと昆布の茶回復

鎌倉時代の『世俗立要集』「梅干ハ僧家ノ肴」

戦国時代 兵糧食

江戸時代 庶民の食卓 梅干しの紫蘇漬け

明治維新で一時途絶え

3000年以上も前 中国原産
 神聖な力=菊酒 菊の香りの酒 唐から改良品種 散らばった米
 「礼記」鞠 (はなびらが米にたとえ)

菊
 751年「懐風藻」に長屋王が新羅の使節への宴会
 *万葉集に無し『百代草』? 絵画や漢詩から葉草

1200頃以前 後鳥羽院の定め「十六葉八重表菊」 皇室の御紋 刀への刻印から

駒込・巢鴨 江戸菊、美濃菊
 ↓植木屋 幕府が五節句制定 長寿祈願 「重陽の節句」菊酒

尾花

すすき 薄 芒 「秋の七草」
 万葉集 卷8 1537 「秋の野に 咲きたる花を 指折り かけ数えれば 秋の七草」
 1538 「萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花」 桔梗?

およびをり
 江戸中期 『鶉衣』 横井也有 俳文集 「化け物の 正体見たり 枯尾花」 与謝蕪村 「狐火の 燃えつくばかり 枯尾花」

冬	秋	夏	春	
	萩 (141) 芒・薄 (46) 撫子 (14) 葛 (18) 女郎花 (14)	橘 (68) 紅花 (29) 卯の花 (24)	梅 (118) 桜 (40) 藤 (27) 山吹 (17) 馬酔木 (10)	万葉集
	萩 (15) 芒・薄 (8) 女郎花 (18) 紅葉 (40) 菊 (13)		梅 (28) 桜 (61) 藤 (7) 山吹 (6) 松 (14)	古今和歌集
	萩 (20) 芒・薄 (10) 紅葉 (28) 菊 (11)	花橘 (13)	梅 (27) 桜 (100) 藤 (7) 柳 (14) 松 (71)	新古今和歌集
南天 万両 水仙 大根 葱 山茶花 山水	葡萄 桃 梨 柿 栗 柚 楓 蘭 芭蕉 鶏頭 桔梗	牡丹 阜 桐 杜若 文目 菖蒲 百合	椿 躑躅 桃 桑 菜の花 蒲公英 蕨 蓬	



ヨモギ (キク科)



ツクサ (ツクサ科)



ノシグク (キク科)



リュウノウギク (キク科)

百代草

お父さん お母さん 屋敷の後ろに生えた
百代草のように百代まで長生きして下さい
私が帰るまで

父母が 殿の後方の
百代草 百代いでませ
わが来たるまで

万葉集

古今和歌集

卷五 秋詠下 二六九

ひさかたの雪の上ぞみる菊は
天つ星とぞあやまたれける

藤原敏行

宮中の殿上から見る菊は星と見間違ふほどに美しい

当時としては、菊は珍しい。

身分の高い人しか見る機会が無かたのだろう。

普段、見ることのない菊の花の美しさを詠んでいる。

？ やつと宮中にあがれたので、宮中を賛美

和歌を詠って媚びへこむい？

△百人一首▽古今和歌集 秋上 二六九

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞよどろかれぬる

藤原敏行

秋が来たとは、きり目にするのは
できなけれど、風の音に秋の訪れを
気づかされる 恋の行方

「鶏衣」横井也右

元禄15
1702
2
1783
天明3

俳文集

①4

一年松木 淡々已れ高ぶり 人を慢ると伝へ聞文あはれ

初めて対面して化物ばけものの正躰見たり 枯尾花

其の誠心なること大概たゞいこの類なり

化物の正躰見たり 枯尾花

幽霊←の正躰見たり 枯尾花

疑心暗鬼に陥った心境下では、風になびく枯れ尾花のような
何でもないものも怪しげに思え、幽霊のようなただならぬ
ものと思え、さう見えてさう見えてさう見えてさう見えて

与謝蕪村

享保元
1716
2
1784
天明3

蕪村句集

狐火の燃えつゝばかり 枯尾花

夜の野原にて風に揺らめく枯尾花
怪しく燃え盛るこの世のものなぬ狐火のようた

春の七草

七草粥

邪気をおい難病を万病を
除くよといとして食へる

御節料理で疲れた

胃を休め野菜の不潔を

補う

人日の節句

一月七日

鎌倉時代「河守抄」

「食所撰」(源氏物語注釈)

「御伽草子」

芹 薺 御形 繁縷 仏の座 菘 古羅菊

セリ ナズナ ゴギョウ ハコベラ ホトトギス スズナ スズシロ だんご

秋の七草

万葉集巻八

山上憶良

一五三七

秋の野に

あきを 咲きたる花を

指折り

かき数ふれば

七草の花

一五三八

ヤマトシタ

萩の花

尾花葛花

瞿麦の花

姫部志

藤袴

朝顔の花 (桔梗)

花野と散策一観賞

京の都  紅葉を愛でる

→ 現代の度々に探賞

平安時代 藤原道長 十月二十八日

鎌倉時代 藤原定家 十一月七日 (紅葉の盛)

江戸時代 後期 頼山陽 十一月十一日

(江戸後期) 遅くなるといふ

昭和戦後 高度成長期 十月後半

令和二年 紅葉 十二月初め

綿秋の美

二〇五〇年はいかに？